JAPAN CLUB ZURICH ❊ SEIT 1961

EDELWEISS

NOVEMBER 2022

食欲の秋

スイスの紅葉は、パッと目を引く燃えるような赤が綺麗ですね。黄色も金色のように輝いて、太陽に照らされていると美しい絵画のようですが、だんだん陽光も弱くなってくると、色も濁って、裸の木々は見るだけで寒い…。

そんな11月こそ食欲の秋！今年の我が家はプラムタルトが途切れないように次々と焼かれています。その他、栗、きのこ、そしてジビエ…。そろそろフォンデューも食べたくなりますね。固くなったチーズを溶かし、古くなったパンでかき回して食べるのは、山で暮らす倹約家スイス人の知恵だそうですが、霧が深くなったり、雪が降ったりすると、「今日はフォンデュー日和」なんて思うのはスイスに馴染んだ証拠？

そしてスイスの11月の催事と言えば、カブ提灯パレードとベルンの玉葱市。前者は11月11日の聖マルティンの日やその前に催されます。起源を遡ると、蕪に怖い顔を彫って悪霊を遠ざけていた古代ローマ人やケルト人にまでたどり着きます。ハロウィンと同じなのですね！他には、蕪はジャガイモと並んで、1年の最後に収穫され、冬の間の貯蓄食なので、その収穫感謝祭の意味もあるようです。感謝と言えば、後者も、1405年にベルンで起こった大火事で隣のフライブルク州民に助けてもらった感謝から生まれたと、ベルン在住の会員さんに教えてもらいました。今年は11月28日です。

今年はエネルギー不足が心配されているだけに、室温19度でも心底温まるフォンデューを、感謝しながら食べて元気に過ごしたいですね。！(SN)

HERBSTGEUNSSER

カブ提灯パレード (Räbeliechtliumzug)

各地区で開催されるRäbeliechtlium-zugは、Tagblattによると今年も中止の地区が多いとのことですが、11月4日にはOberstrasseで、5日はLimmat Schulhaus/KlingenparkやTurbinen-platzで、12日にはRichterswilやAltstetten GZ-Loogarten等で決行されるようです。念のため直前に再度ご確認の上、おいで下さい！

(c) Verkehrsverein Richterswil

巻頭文
「あの世」を信ずる人、信じない人・無宗教を自認する日本人に待ち受ける死の恐怖　青砥　玄（会長）

私のイチオシ、シェアします!　Vol.29
『日本人街』のあるドイツ・デュッセルドルフ　江川　恵

ホイツァメ♫　Vol.10
「暗い"a"」のマジック　長坂　道子

美のプリズム　Vol.18
秋のローゼンガルト・コレクション　柿沼　万里江

Kette(会員の輪)　Vol.163
岡田　明さん（チューリッヒ在住）

JCZ賛助団体 (アルファベット順)　Kowa Holdings / Pharmaceutical Europe AG　Kuoni Global Travel Services (Schweiz) AG / JTB Corp.　NIPPON EXPRESS (SCHWEIZ) AG　Nishi Japan Shop / Japan Restaurant Bimi & Saku　TOYOTA AG

巻頭文

「あの世」を信ずる人、信じない人・無宗教を自認する日本人に待ち受ける死の恐怖

青砥 玄 (会長)

死後の世界

人は死んだらどこへ行くのか？　おそらく人類が誕生して以来、永遠のテーマとなっています。宗教が「天国」や「浄土」といった死後の世界を提供したのも、その疑問に答えるためでしょう。「あの世」が存在するかどうかは誰にもわかりませんが、戦前までの日本人は少なからず信じていました。「お天道様が見ている」「ご先祖様に申し訳ない」「死んだ父親に怒られる」…あの世があり、死後の世界から見つめられている感覚です。

たとえば、私が子供の頃にもいじめはありましたが、昨今のいじめ事件のような悲惨ないじめにはならなかった。「そんなバカなことをやっているとご先祖様に叱られるゾ」という感覚があり、死後の世界から見つめられている怯えのような感覚が自制心や克己心を生み、子供の倫理を形成していたからです。

新渡戸稲造がベルギーの学者に、「日本の宗教教育は？」と聞かれ、「ない」と答えたら、「宗教教育なしにどうやって道徳を教えるのか？」と問われ、ひどくとまどったというエピソードがあります。それに答えるために書いたのが「武士道」ですが、武士には武士道があっても、多くの庶民にはこれといったものはありません。

という書き出しで始まる、奥野修司氏（ノンフィクション作家）の月間Will９月号の文章です。このところ世界中で死を考えさせる出来事が立て続けに起きています。そんな時、この奥野氏の内容は大いに考えさせられますのでご紹介しながら皆様と考えてゆきたいと思います。

忘れられた「あの世」

昔から、日本人の価値観は玉ねぎの皮みたいに重層構造になっていると言われましたが、コアにあるのが「あの世この世」観だったに違いありません。ところが、現代人は「あの世」を信じなくなっています。日本では戦争への反省から、戦前を否定するような合理主義的な教育がおこなわれ、再現性のあること（科学）以外は排除されてしまったと奥野氏は嘆きます。

とくに合理主義的な教育を叩き込まれたのが、団塊の世代で「死んだら土になる」と教えられ、「あの世」を信じている団塊の世代はたった一割未満というデータもあります。千数百年に亘って何十億人という人が「あの世」を信じてきたことを考えると、死後の世界を考えなくなった現代こそ異常な時代かもしれません。

愛する人の死

黒澤明監督の名作「赤ひげ」（1965年）では労咳（結核）を患った男が亡くなる時、この世にいないはずの女房が目の前に現れるシーンがあります。これは「お迎え」と呼ばれ、死の間際に亡くなった人物や通常は見ることが出来ない事象を見る不思議な現象です。「お迎え」で現れるのは家族や親族だけでなく、数は少ないのですが「目の前に紫色の光の粒が広がっていた」「お花畑が見えた」「死んだ猫が来た」「白い袈裟をかぶったお坊さんが呼んでいた」など人それぞれです。もしも亡くしたはずの愛する人にもう一度会えたら、遺された人はどうするのでしょうか。

「せん妄」や「幻覚」なのか

奥野氏が「お迎え」に注目したのは、宮城県にある岡部医院の故・岡部健医師と出会ったことがきっかけでした。医師の遺書を書くつもりで取材をはじめ、2013年に「看取り先生の遺言」（文芸春秋）を上梓。岡部医師は２千人を超えるがん患者を看取った在宅緩和医療のパイオニアとして知られ、末期患者の多くが「お迎え」を見たことに注目していました。「お迎え」と聞くと、何となくいかがわしいと思われる方もいるでしょう。実際、現代医学では「せん妄」や「幻覚」として処置されることがほとんどです。しかし岡部医師は、これを治療の対象にするのではなく、死の準備過程で起こる自然現象であり“「お迎え」現象”として受け止めるようにすれば、死にゆく人も看取る家族も穏やかになれるのではないか、そう考えました。そして2002年から東北大学の文化社会の専門家や社会調査士などと一緒に、遺族を対象に「お迎え」体験を調査されたのです。

お迎えの正体

なお、お迎えを体験した場所は、自宅が87.1％で、一般病院は5.2％にとどまります。自宅の方が圧倒的に「お迎え」を見る率が多い理由について、岡部医師は「病院の治療が、穏やかな死をともなってくるような意識平癒を壊すようなことをしているのではないか」と説明されます。日本人の死亡原因のトップはがん（悪性新生物）です。がん治療の主流は抗がん剤ですが、近年、抗がん剤を使用しない患者が急増しています。奥野氏は長年、抗がん剤について取材しており、実は抗がん剤を使おうが使うまいが延命率はさほど変わらないことが分かっていると言います。この事実が、普及し始め、激しい闘病生活を強いられる抗がん剤を使わない患者が増えているのです。抗がん剤は痛みや精神不安を招くので、とても「お迎え」を見られるような状態にはならないのです。

岡部医師が言うように、「お迎え」はナチュラル・ダイイング・プロセス（自然死の過程）の臨終に近づいていく過程で人間に起こる生理現象ではないでしょうか。枯れるように亡くなる自然死こそ、「お迎え」を体験するカギなのかもしれません。

更に奥野氏いわく「“お迎え”は人間の根源的なものに根差しているのかもしれない。実証は出来ませんが、精神医学者のユングのいう集合的無意識（この世に生きるすべての人が共通で持ち合わせる潜在記憶）のなかに組み込まれたような現象なのかもしれない」とのこと。

興味深いのは、“お迎え”を体験した故人の様子が「普段通りだった」「落ち着いたようだった」「安心したようだった」との回答が合わせて65.1%もあったこと。つまり“お迎え”を見た方が、穏やかな死を迎えられるということ。

なぜ“お迎え”が語られなくなったのか。奥野氏いわく「それは戦後の合理主義的な教育が原因。戦後、ドイツはアウシュビッツの反省の元に、宗教的倫理教育が始まりましたが、戦後、日本人は宗教を否定してきた」とのこと。

死を意識した時に何よりも恐ろしいのが「死への“希望”がないこと」。死ぬことに希望がなければ、それこそ土になって消滅してしまいます。いっぽうで、人は「信じるもの」があれば死ぬのが怖くなくなります。「信じるもの」と聞くと、宗教を想像してしまいがちですが、「あの世」に行けば死んだ家族に会える、死んだ友達に会える、死んだペットに会える…。ささやかですが、それが“希望”になり、死ぬことが怖くなくなるのです。“お迎え”を見た人が穏やかな表情で亡くなったのは、“お迎え”を見たことで「あの世」の存在を認めたからではないかと奥野氏は言います。

団塊の世代の「死に支度」

奥野氏自身、団塊の世代で、死はまったく怖くないと言います。更に氏いわく「昨年、新型コロナワクチンの副反応で３週間寝込み、体重が６キロほど落ちた挙句、血圧が60まで下がった。まるで亡くなる1か月前のがん患者と同じ状態です。人は亡くなる2週間前くらいから、ものすごい倦怠感におそわれるといいます。だから死ぬときは、倦怠感で生きることをあきらめてしまいます。まさにあの時、私は生きることをあきらめていました。もっとも、“お迎え”は見られませんでしたが（笑）。あの時、なぜ死ぬことが怖くなかったのか。それはきっと“あの世”を信じていたからかもしれません。」

合理主義的な教育を続けてきたツケが回り、日本人は再現性のないことは簡単には信じられなくなってしまいました。ここまで述べたことも、一部の読者にとってはオカルト話に聞こえるかもしれません。奥野氏も2008年頃まで、本音では「あの世」や「お迎え」を信じていなかったとのこと。ところが、いろいろな人の不思議な話を聞く中で「ひょっとしたら…。」と思うようになり、信じられるようになったそうです。これから、団塊の世代がどんどん亡くなっていく時代は必ずやってきます。氏の話を頭から否定せず、死んだ後も「あの世」で人生が続くと思えば、死ぬまでの老後生活が楽しくなるのではないか、という奥野氏の言葉は大いに考えさせられる内容です。

私個人も、老後の生活をいかに送るかについては、色々な思いが湧いてきますが、いつかは来るであろう死への恐怖ではなく、それを受け入れて、その時まで悔いの残らない人生を過ごすべく、この瞬間を最善に生きつつ、楽しみながら生きていければと思っている次第です。

ご意見・ご質問は青砥まで
Gen.Aoto@toyota.ch

PICK UP 29

STADT, BERG ODER INSEL?
私のイチオシ、シェアします!

『日本人街』のある ドイツ・デュッセルドルフ

江川　恵

今月は私が2年間帯同生活をした「デュッセルドルフ」の魅力についてご紹介します。

ドイツ16の連邦州の中で最も人口の多い「ノルトライン・ヴェストファーレン州」、その州都であるデュッセルドルフ（以下デュッセル）。ここは、欧州最大の工業地帯と言われるルール工業地帯の重要都市として知られ、500以上の日本企業が進出し、8400人以上の日本人が住んでいる欧州屈指の日本経済拠点でもあります。デュッセルの人口61万人の内、約1.4%にあたる数の日本人が住んでおり、生活インフラは整い、おかげで私も日本とそう変わらない生活が送れました。

それでは「わざわざ日本人の多い街に行って何が楽しいの？」をお伝えしてまいりましょう！

一つ目は何と言っても『Little Tokyo』の名で親しまれている日本人街です。そのメインストリートは「インマーマン通り」で、なんと昨年12月9日、「Immermannstraße」の標識の下に日本語標識追加の除幕式が行われました。その通りには「ホテルニッコー」（現在は直営ではない）をランドマークに、日本食材店「大洋」「松竹」、日本人美容室、髙木書店、雑貨屋、居酒屋、カラオケバー、とんかつ、パン屋、おにぎり屋、蕎麦屋などが立ち並び、特にラーメン屋は６軒もあって、人気の店先にはビジネスマンや、漫画やアニメ好きのドイツ人の若者たちが列をなしています。どの日本食も比較的安価で、それでいてレベルは高く、美味しいです。私がいた当時、長友・香川・内田篤人・長谷部など欧州所属の人気サッカー選手も度々やってきては、美容室で髪を切り、定食屋で食事していて出くわすこともある『Little Tokyo』、お勧めです。

そのサッカーといえば、まもなくワールドカップ開幕。日本の初戦相手は強豪国ドイツ！あちゃー ドイツ国民は本当にサッカーが大好き！ドイツ・ブンデスリーガに憧れて移籍してくる日本人トップ選手たちも多く、デュッセルを本拠地とする「フォルトナ・デュッセルドルフ」にも、現在、田中碧、内野貴史、アペルカンプ真大の3名の日本人選手が在籍しています。特にMFの田中選手は先日もフル出場。チームの勝利に貢献したそうです。私が行ったその年、チームは15年ぶりに1部に返り咲き、それはそれは物凄い盛り上がりでした。残念ながら今は2部に降格しましたが、日本人選手の活躍で来シーズンは1部昇格して欲しい！　ホームスタジアムはライン川のほど近くに位置するメルクール・シュピール・アレーナ。試合観戦もいいですし、練習日は、気軽にサインに応じる選手も多いので練習見学もお勧めです。

最後はまもなく始まる「クリスマスマーケット」です。ドイツはクリスマスマーケット発祥の国。その三大クリスマスマーケットといえば、ニュルンベルク・ドレスデン・シュトゥットガルト。ですが、デュッセルもそれらにひけをとらない、むしろ、旧市街をメインにテーマの違ったマーケットが徒歩圏に複数点在しているので、たくさんのクリスマスマーケットを回ったようなお得感が味わえます。まずは、メイン会場でもある市庁舎前の『マルクト広場（Marktplatz）』。ここのテーマは「職人市場」で、職人さんの屋台では実演を見て楽しめます。「小さい天使のマーケット（Engelchen-Markt）」は広場全体がキラキラしていて屋台の上の天使たちがお出迎えをしてくれます。他にもスケートリンクやメリーゴーランドのあるマーケットなど様々です。今年は11月17日〜12月30日までの開催です。

飛行機で日帰りも可能なデュッセルドルフ。Little Tokyoで買い物して、昼はラーメン、夜はクリスマスマーケットでグリューワイン片手に屋台の食べ歩きなどいかがでしょうか。

ANA
マイレージクラブ
ためたマイルを有効利用！
10,000マイル＝90フラン
チューリッヒの西ジャパンショップの商品券に交換できます！
詳しくはANAウェブサイト（マイルを使う）をご覧ください。
www.ana.co.jp/ja/ch
ANAジュネーブ営業支店 TEL：022-909-1050
E-mail:gva@ana.co.jp
ANA Inspiration of JAPAN

【大使館からのお知らせ】

(1) 領事出張サービス (チューリッヒ日本人学校にて)
2023年2月18日(土) 10:00 -12:00,13:00 -15:00
申し込み受付は2023年2月3日(木)大使館必着

(2) 日本入国の際に必要な書類
- ワクチン３回目の接種証明書（英語記載がない場合は自身で訳を付け、持参）か、72時間以内の出国前検査証明書（陰性証明）
- 質問票
- ３回目接種の有効期限なし

(3) 外国人の新規入国
- コロナ禍前に９０日以内の観光で査証を取らずに日本へ訪問していた方は、同様に不要
- 外国人観光客の個人旅行が再開

スイスドイツ語が少しずつわかるようになってきたある日、長年連れ添った夫に「これからスイスドイツ語でしゃべってくれてもいいから」と宣言してみた。ヒヤリングの練習にもなるし、と我ながら健気なほど前向きな気持ちだった。

夫はチューリッヒに生まれ育っているが、父母がイラク人とアメリカ人という移民家庭だった上、ギムナジウムの途中からはインターナショナルスクールやアメリカ、フランスの大学などに在籍した背景もあり、日本語も含め、たくさんの言葉を話す。私たちが出会った頃はフランス語、その後、いつしか英語が主な家庭言語になったが、スイスドイツ語を話す彼の姿というのを、実はそれまで私はあまり見たことがなかった。

率直に言って、それは「まるで別人」だった。

その声は一体どこから出てくるのか？その表情は、その身振りは、どなたさんのもの？

慣れのせいもあるかもしれないけれど、ハイジャーマンや英語、フランス語などを話す夫はいずれも私のよく知る同一人物だったし、言語構造の全く異なる日本語を話すときですら、これほどの「別人」感を抱いたことはなかった。

スイスドイツ語の何が、一人の人間を、ここまで別人にするのだろうか。その理由を知りたいと思い、その声にじっと耳を澄ませること数ヶ月。ある日、ああ、これだ、と気がついた。秘密（のひとつ）は、恐らく母音の「a」にあるのだ。

これは実はよく知られているので今さら私が指摘することでもないけれど、スイスドイツ語の「a」には二種類あり、そのうちの一つは「暗い"a"」と呼ばれ、「a」と「o」が混ざったような独特な音。この音を出すためには顎を下にやや伸ばし、喉に近い方に音を閉じ込めるようにするようだ。schaffe, Wald, KaffeeからParisまで、特にチューリッヒ方言では軒並みこの暗い音がやってくるので、それこそParisなど、とてもあの光の都と同一視できないほどの響きとなる。

これに対し、もう一つの「a」は発音記号で書くと［ae］。スイスの人がiPadとかJazzという時に揃って口にするペチャリと横に伸びたような不思議な「a」の音、といえばわかっていただけるだろうか。

この二つの「a」が出てくるときの彼らの表情、いや、我が夫の表情と声音は、他言語を話している時には遭遇しない独特のもの。そのことに私は気づいて、ははーん、とうなったのだった。

前者の「暗い"a"」では「暗い」というだけあって、「o」の音に近づいたそのくぐもった響きは、軽やかで明るい「a」とずいぶん違う。そして顎をだらんと下げる口の形のせいもあるのだろう、傾向として声が少し低くなりがちだ。スイスドイツ語を話す時の夫の声が、全体的に低く感じられるのも、やはりこの「a」に負うところが大きいのだろうと想像する。テノールだと思っていた人が、いきなりバスに声変わりしていて、通り過ぎざま、あれ？と振り向くような感じといったらいいだろうか。

顎を下げ、声変わりして登場した「別人」との出会いは、長い付き合いの相手なのに、思わず「初めまして」と握手の手を差し出したくなるような、初対面の人に対峙するような照れ臭さの感情をもたらした。そして思い出したのだ、私が参加する合唱のかつての指揮者さんはドイツ人で、やはりこのスイスの「a」がよほど気になったのだろう、口を酸っぱくして「明るい"a"で」とダメ出ししていたということを。逆に今の指揮者さん、スイスはトゥルガウ州のご出身。母音のやり直しはほとんどない。その結果、みんなで歌うプーランクのフランス語が、うーん、やはりどこか泥臭く、フランス語本来の軽やかな美しさは望むべくもない、という状況になっている。

以前の私であれば、そこで眉をしかめたかもしれない。けれどスイスドイツ語を含めた言葉の多様性、マイノリティ言語一般の奮闘を慈しむ境地に達した今となっては、それもまた良し、とニコニコしているのである。

※ ホイツァメ/ Hoi zäme
Hallo, zusammen は「みなさん、こんにちは」という意味のスイスドイツ語表現

BULLETIN BOARD

ピアノレッスン

お子さまから大人の方まで幅広くレッスンいたします。ピアノが好きな方、ぜひ一緒に音楽を楽しみませんか？グランドピアノにてレッスンいたします♪ お気軽にメッセージください。
Piano：住村奈緒
Profile：パリ国立高等音楽院卒業、現在チューリッヒ芸術大学ソリスト課程在籍
e-mail : nao23smmr@gmail.com

にほんクリスマスマーケット

11月26日（土）14:00 ~ 20:00
Villa Crescenda Bundesstrasse 5, 4054 Basel-Stadt
バーゼル中央駅よりトラム1、8番で3つ目Schützenhaus下車すぐ。
主催：Tateishi www.tateishi.ch
日本食や音楽：日本の唄(15：00~/17：00~/19：00~) 竹下数雄
三味線演奏(16：00~/18：00~)
岡田真由子　竹下
ベビーカーでも入れます。
バイオリン 坪井悠佳
ピアノ・オルガン 大橋雅子
場所：Reformierte Kirche Breite
Gerlisbergstrasse 4 8303 Bassersdorf ZH
大橋
e-mail : dklmce0511@gmail.com

家庭教師いたします

Zurich近郊で、日本での各種科目（高校受験まで）の家庭教師をいたします。 難関中学の受験経験あり、京都大学理学部卒業、塾・家庭教師での指導経験あり。その他、ご要望に応じ、出来る限り対応させていただきます。詳細につきましてはお気軽にお問い合わせください。ヤスナガ
ZurichJapanTeacher@gmail.com

ファミリーコンサート
ヴィヴァルディ「四季」

大画面で映し出される美しい絵本を見ながらバイオリンとオルガン・ピアノを聴けるお話付きコンサート
日時：11月6日（日）15：00
入場無料

hataraku.ch
スイスで「働く」をサポート！

ウェブサイトhataraku.chでは、スイスの日本語コミュニティ向けの求人広告を掲載中。仕事・人材をお探しの方はどうぞご利用ください。
そのほか、求人・求職活動や各種人事事務、人事プロジェクトなどで企業や個人のお手伝いも致しております。
お気軽にご相談ください。
渡辺トブラー幸子
e-mail : info@hataraku.ch

ZURICH FILM 18 FESTIVAL

チューリッヒ映画祭潜伏レポート

チューリッヒの街中に金縁目玉が散りばめられると、「ああ、今年も映画祭の季節かあ」と思う程度だったチューリッヒ映画祭（ZFF）。今年はご縁あってボランティアとして潜伏取材することにしました。

7月初旬に登録すると、Zoomでの集団説明会を経て、参加希望日と契約書を提出します。最初はやる気満々だったものの、夏の休暇から帰る頃には本業のアポでスケジュールが埋まり始め「最低提供時間数＝54時間」が取れなくなってきた！「ご縁がなかった」と諦めていた9月初旬、担当者からリマインダーメールが来たので、事情を書くと、「それでもいいから」と誘ってくれて、9月12日のキックオフ・アペロへ。

Shilcityの会場はボランティアで溢れ返り、なんだか楽しそうな雰囲気。それでも独りだと、ちょっと手持ち無沙汰…。

数日後ボランティア・バッグをEnge駅の側のZFF事務所に取りに行き、ボランティア用の緑のTシャツももらって気持ちが高揚！帰って来てリュックサックの中を開けると、映画2回分の無料コード、Jelmoli１階の15％割引券、Degenriedの20％割引食事券、Bowlzの20％割引券、携帯用セルフィライト、Diorのマニキュアと口紅、映画祭ロゴのついた歯磨きセット、ナッツの詰め合わせと木苺味のポップコーン、りんごジュースが入っててウキウキお得気分！それぞれ希望の職種をいくつか選んだ後、私はオフィスサポートと映画館でのサポートが割り当てられました。スタッフ用Tシャツと黒ズボン、黒靴でメンバーカードを首に下げると、すっかりスタッフ気分。食事時間にはボランティア用食堂でタイカレーを戴いてホクホク。みんなポジティヴな雰囲気で、ZFFの一員であることを楽しんでる。会期中にはボランティアを映画に招待してくれたり、その他の映画も空きがあればメンバーカードで入れるらしい。試す勇気はなかったけど…。

最後は御礼のアペロもあって、来年もスケジュールが合えば絶対またやるぞ！フルワークを９回以上受け持った人にはボーナスとして100〜200Fr.くらいも出るらしい。540人のボランティアの１人だったけど、ZFFが身近に超接近して来ました。来年は皆さんも是非、ボランティアしてみませんか？

Schweizerisch-Japanische Gesellschaft
Swiss-Japanese Society スイス・日本協会

スイス・日本協会のハーグ元会長の長年の夢だったという雅楽のスイス招聘が、コロナ禍のため1年遅れて9月末に実現しました。9月２２日連邦工科大学で行われた講義では、熱心にメモを取ったり、携帯電話でビデオを撮ったりする学生もいる中、北之台雅楽アンサンブルの楽師達はプロフェッショナルに黙々と各楽器を弾いて聞かせてくれました。

プレゼンテーションはチューリッヒ大学東洋美術史教授のハンス・トムセン氏で、日本語、英語、ドイツ語を同時通訳しながら、日本人より腰が低いデンマーク人でした。楽器の説明の後、十二単の着付けパフォーマンス、そして踊りを見せ、最後に「おかあさんといっしょ」の歌のお兄さんだった日向理が「さくら、さくら」「荒城の月」「故郷」を歌いました。（実は彼は大学の同期で、30年ぶりの再会にビックリ！）雅楽アンサンブルでは西洋音階の中で出せない音があるらしく、ハーモニーが難しそうな部分もありましたが、日本人の郷愁も誘い、大好評！翌日のコンサートでは舞踊曲も２種類見られ、「君が代」と「越天楽 今様」を歌った後、ハーグ氏直々のアンコールに応え、再度「荒城の月」を歌ってくれました。西洋人だけでなく、戦後西洋音楽教育のみを受けて来た日本人にも東西折衷の音楽は有益でした。

終演後にスイス人がポロッと口にした感想に目から鱗が落ちた気がしたのです。「この音楽を聴くとチャクラがパッと開く感覚がある」。そうか、天皇家が1300年間守ってきた雅楽とは、実はヒーリングミュージックだったのですね！

北之台雅楽アンサンブルはその後、ベルン、ジュネーヴと移動し、パリでの２公演後に帰国しました。日本にはこのような雅楽会が各地にあるそうです。日本の小学校教育でも1996年から雅楽について言及するようになったものの、当の小学校教諭自身が雅楽を知らないため、雅楽アンサンブル等が教えて回っているそうです。

2009年にユネスコ人類無形文化遺産代表リストに登録された雅楽をスイスにいながらにして聴けたのは有り難い体験でした。そしてユネスコのサイトにもあるように「日本人のアイデンティティと日本社会の歴史の結晶を確認するための重要な文化的ツールであるだけでなく、時間をかけて絶え間なく再現することで、複数の文化的伝統がどのように融合して独自の遺産になるかを示すもの」なんだなあと、改めて思いました。世界最古の音楽アンサンブルを持つ国民という自覚を持って、これからも日本文化に接していきたいですね。

ベルン公演後の白石大使のコメント→

Scan Me

team104からのご報告とお礼

team104.ch

9月18日(日) お天気にも恵まれ、盛況のうちに第11回東北大震災被災児支援のためのバザーを終えることができました。関心を寄せ、和食器や着物、その他の寄付をして下さった方々、事前、当日のお手伝い、そして当日お出掛け下さった方々の温かいご支援に心からお礼を申し上げます。

売上げと寄付の全額CHF6867.40(¥1003.848)は、次の3県の被災児童のための教育基金に寄付いたしました。

いわての学び希望基金 www.pref.iwate.jp
みやぎこども育英募金 www.pref.miyagi.jp
ふくしまこども寄附金 www.pref.fukushima.lg.jp

今後ともよろしくお願い致しします。

2022年10月　team104 一同 team104.ch

JAPAN CLUB ZURICH SEPTEMBER EVENT
WINE TASTING 2022

チューリッヒ湖畔でワインテイスティング

Kempraten駅から歩いて10分ほどのHöcklistein社のブドウ畑を訪れました。担当のFrankさんの案内で、気にならない程度の小雨の中、畑の歴史、Zürichsee地区特産のブドウ品種Räuschling、最近のお天気とブドウの出来具合など、興味深いお話を伺いました。その後、すでに綺麗にセットされた可愛らしい部屋でテイスティングが始まりました。Winzerplatteと共に、ワイン６本をテイスティング。それらのワインの話はもちろん、フランスや南米のワイン、ワイン酵母、樽のお話、加えて興味深々の参加者からの質問と、Frankさんの情熱的な解説が続いて時間がたつのはあっという間。気が付いたら３時間が過ぎていました。ほろ酔い気 分でおしゃべりを続けながら、帰途につきました。知らなかったワインの発見やこの地区のことを知ることができ、また、皆さんと楽しい時間を過ごすことができました。企画してくださったスタッフの皆さん、有難うございました。

（T. O）

美のプリズム Vol.18

秋のローゼンガルト・コレクション

パブロ・ピカソ　《アンジェラ・ローゼンガルトの肖像》1958年

美術館にとって秋は勝負の季節である。年末年始にかけて大勢の方々に足を運んでもらいたく、その年の目玉となる展覧会を秋に企画する。末尾に、今秋お勧めする展覧会情報を記載しておくが、今回の「美のプリズム」では、その対極となるルツェルンの美術館、ローゼンガルト・コレクションについてご紹介しよう。2002年に開館して以来、展示作品を一切動かさず（つまり作品を館外に貸出さないだけではなく、展示室の中で作品の位置を移動させることもない）常設展のみで人々を惹きつける、目まぐるしい美術界において稀有な存在感を放つコレクションについてである。

魅力の源は、なんと言っても、今年90歳を迎えたとは思えないアンジェラ・ローゼンガルトその人である。彼女の凜とした佇まいと優美さ、そして溌剌とした生のエネルギーは、昔から何一つ変わらない。ピカソは20代前半から30代前半にかけてのアンジェラの姿を何枚もの肖像画に残しているが、このスペイン人の画家は、若さゆえの美しさだけに幻惑されたのではないだろう。瞳の奥の輝きを見逃さなかった。アンジェラは、16歳という若さで、父親で画商のジークフリート・ローゼンガルト(1894-1985)のビジネス上の片腕となった。ジークフリートは、ピカソ、ミロ、シャガール、マティス、ブラック、レジェといった同時代の芸術家と親交を深め、アンジェラとともに300点を超えるモダン・アートのコレクションを築き上げた。1992年、コレクションの保存と一般公開を目的とし「ローゼンガルト財団」が設立され、2002年には、新古典主義様式の旧国立銀行の建物に、ローゼンガルト・コレクション美術館が開館した。

美術館の基本方針として、作品を貸出すことはないが、これまで私が展覧会を準備し、また書籍を出版した際には、アンジェラさんからは貴重な資料や情報を惜しみなく提供していただいた。一つ一つの作品に対する彼女の驚異的な記憶力には心底感嘆するし、研究に対する最大限の理解と率直な協力にも常々深く感謝している。彼女の中にはよき伝統を守ろうとする強い意志と、分け隔てなく飾らない精神が混在しているのだ。

ジークフリートの叔父でユダヤ系ドイツ人のハインリヒ・タンハウザー(1859-1934)は、20世紀初頭、ミュンヘンで画廊を開いた。開業当初、ある程度評価の定まっていた印象派や後期印象派の画家たちの作品を扱っていたが、次第に、当時ミュンヘンで活動していた青騎士グループ（マルク、カンディンスキー、マッケ、クレーらが代表）、新進気鋭のピカソやブラックら、いわゆる「アヴァンギャルド（前衛）」の画家たちの作品も扱うようになる。青騎士の記念すべき第一回目の展覧会は、タンハウザーの画廊で開催された。ジークフリートはこの目利きの叔父のもとで画商の仕事を覚えたのだ。第一次世界大戦が終了し、ワイマール共和国が成立すると、文化の成熟を意味するいわゆる黄金の1920年代が始まる。1920年、ジークフリートは叔父の命を受け、ルツェルンにタンハウザー画廊の支店を開くべく、スイスにやって来た。画商の仕事は軌道に乗り、1928年にはローゼンガルト・ギャラリーに名義変更し、1937年、叔父から独立を果たした。

現在でこそ、最先端のギャラリーはチューリヒに集中しているが、1920年代当時、ドイツの老舗画廊がスイスに支店を開く際には、真っ先にルツェルンが選ばれた。リギ山、ピラトゥス山を筆頭に中央スイスのアルプス観光の拠点として、ルツェルンは19世紀半ばから途切れることなく大いに賑わっていたのだ。全ヨーロッパからやってくる富裕層の観光客を見越して、夏と冬のハイシーズンだけ開く画商もあったくらいである。

さて、1933年にナチスが政権を掌握すると、ユダヤ系ドイツ人の画商たちは移民に対して寛容なアメリカにこぞって亡命していった。1933年以前、すでにドイツからスイスに移住し開業していたいくつかの画廊は、ナチスの便宜を図ることで懐を潤すことになる（あるいは画廊の言い分からすると、「表向きナチスに従順に協力しながら、優れたモダン・アートをナチスによる破壊から救った」となる）。ナチスが「退廃芸術」と烙印を押した作品が、ドイツの美術館や個人コレクターから不当に没収、略奪され、スイスの美術市場に流れ込んできたからである（こうしたテーマに関心のある方は、末尾に記載した、Zerrissene Moderne. Die Basler Ankäufe «entarteter Kunst», Gurlitt. Eine Bilanzをご覧いただきたい）。没収品、略奪品を売買して得た収益はナチスの懐に入った。しかしジークフリートは、これらのマネーロンダリングには加担しなかった。

第二次世界戦後、彼は、クレー作品の売買、ひいては、画家の死後の名声に関わる重要な役割を担うようになる。1947年、クレーの遺品コレクションを管理するクレー協会から正式に、クレー作品の販売をスイスで行ってよい唯一の画商に任命された。その理由として、画家の死後、クレーの妻から作品を借りて販売目的の回顧展を1945年に開催したことが考えられる。これがクレー家との初めての共同作業となった。展示品の半分は首尾よく売却され、残りは、委託ではなく画廊が買い取った（太っ腹である）。クレー家からの信頼も厚く、またビジネスの才覚もあることから、クレー協会から特権的な地位が与えられ、ジークフリートとアンジェラは800点以上のクレー作品を取引した。

ローゼンガルト・コレクションでは、クレー作品が量的にも質的にも特別な位置を占めている。それは、大叔父、父、娘と三代に渡りクレー作品を大切にしてきた長い歴史と深い愛情が根底にあるからである。125点もあるクレー作品の中から個人的にあえて1点選ぶのであれば、まさに1920年、つまりジークフリートがルツェルンにやってきた年に制作された《秋の響き》が好きである。とても小さなサイズの水彩画なのだが、複雑で洗練された画面構造と色彩の美しさに引き込まれる。画面を縦に区切る15本の色の帯は所々屈曲し、細くなったり太くなったり波のようにうねる。帯の内側を仕切る線は隣接する帯に触れると、まるで水面で屈折するように違う方向へ舵をとる。こうした規則性のおかげで、帯を横断していく線はジグザグに蛇行する。歪んだ空間のネットワークでは、基本的に、一つの升目につき一つの色が塗られ、黒、焦茶、薄茶、橙、芥子、群青、紫の鮮やかな色彩が秋のリズムを刻む。画面左右には湿った土を想起させる焦茶の帯が塗られ、上下には紅葉の照り映えの余韻のような金の紙片が継ぎ足された。焦茶の大地に金の光が差し込み、空いっぱいに秋の響きが木霊しているかのようである。色を見ると音が聞こえてくる、音を聞くと色が見えてくる、共感覚的に昇華された美しい作品である。

パウル・クレー
《秋の響き》
1920年

展覧会情報

Nike de Saint Phalle クンストハウス　2023年1月8日まで
Isamu Noguchi パウル・クレー・センター　2023年1月8日まで
Gurlitt. Eine Bilanz ベルン美術館　2023年1月15日まで
Yves Netzhammer Museum Haus Konstruktiv　2023年1月15日まで
Zerrissene Moderne. Die Basler Ankäufe «entarteter Kunst»
バーゼル美術館　2023年2月19日まで

柿沼 万里江 (パウル・クレー・センター研究員)
Zentrum Paul Klee Monument im Fruchtland 3, 3000 Bern

JCZボランティアスタッフの募集

会員の皆様のチューリッヒでの快適な生活をサポートするために、JCZでは一緒に運営のお手伝いをしてくださる方を随時募集しています。内容はイベントの企画、IT知識のある方にはHPの管理、会計担当、会報編集、会報発送作業など、ご提供いただける時間によって様々です。どうぞお気軽にお問い合わせください。

編集：edelweiss@japanswiss.ch
企画、その他：jcz@japanswiss.ch

11月のアフタヌーンカフェ

年々一年の過ぎるのを早く感じるようになってきました。11月の声を聞くと今年もいよいよあと少し、という感じがします。一年で一番暗い季節ですが、楽しいおしゃべりで乗り切りましょう。
日時：11月10日（木）
　　14：00 ~ 16：00
場所：Jelmoli ３Ｆレストラン
申込：JCZ ホームページのイベント申込フォームより、またはメールにてお申し込みください。kikaku@japanswiss.ch

日常ドイツ語サポートサービス

日頃ドイツ語が分からなくて困っていることはありませんか?JCZではそういった方々のサポートを行なっています。ご利用になりたい方は、いつでもメールでご相談ください。
申込先：JCZ事務局
メール：jcz@japanswiss.ch
サポートの内容にもよりますが、10フラン程度を寄付という形でお願いしています。

JCZ11月企画『OKAOキントレ』体験レッスン

皆さん、OKAOキントレという言葉を聞いたことはあるでしょうか。北海道の田中希さんが考案された表情筋トレーニングの手法で、表情筋を鍛えることによって、しわやたるみを改善し、顔の老化を予防することを目的としています。形成外科医の監修のもとに開発された、医学的に根拠のある安全な手技を用いて、インストラクターの四本尚子さんに体験レッスンをしていただきます。オンラインですので、先生は画面越しに皆さんの様子をチェックされます。顔出しOKの方、先着15名様まで。それ以外の方は顔出し無しで参加できます。申込時に顔出しあり、無しをお知らせください。オンラインのリンク等詳細は参加者に直接ご連絡します。
日時：11月21日（月）13:30 ～14:30
申込：JCZ HPイベント申込フォームより
　　またはメールにて、kikaku@japanswiss.ch
申込締切：11月15日 (火)

ベルン日本人会主催「イサム・ノグチ展」鑑賞会のお知らせ

20世紀を代表する彫刻家イサム・ノグチの展覧会がベルンのパウルクレーセンターで開催されています。1904年、日本人の父とアメリカ人の母の間にロサンゼルスで生まれたノグチは、多才な才能を発揮し、今なお世界の芸術家たちに大きな影響を与えています。ご案内いただくのは柿沼万里江さん（パウルクレーセンター研究員）です。JCZの会員の方もベルン日本人会の方と同様に会員価格で参加させていただけます。詳細はHPをご覧ください。定員に達し次第締め切られますのでお申込みはお早めに。

日 時：2022 年11月20 日（日）14:00～
場 所：Zentrum Paul Klee
　　Monument im Fruchtland 3 3006 Bern
参加費：会員 5CHF（各日本人会共通）
　　非会員20 フラン
申込み：①参加希望者全員の氏名
　　②連絡先（代表者の方のメールアドレス）
　　③会員資格の有無と所属日本人会名を明記の上、メールにてベルン日本人会にお申込みください。お申込み受付の後、振込等についてご連絡差し上げます。nipponjinkai@gmail.com
締 切：2022 年11月4 日（金） 定員20 名

スイス・日本協会フィルムマチネ

「東京ゴッドファーザーズ」（2003年）
今敏監督、92分、英語字幕付き
入場無料（コレクテ）
日 時：12月11日（日）11時（10時45分開場）
会 場：Kino Filmpodium
　　Nüschelerstrasse 11, 8001 Zürich

EVENTS & FESTIVALS

チューリッヒ近郊お出かけ情報情報

HP「最新ニュース」の「お出かけ情報」をご参照ください。

japanswiss.ch

Opernhaus Zürich

- グノー《ファウスト》
  11月1, 6, 13, 16日
- オッフェンバック《バルクフ》
  11月4, 6, 9, 13, 17, 19, 22日
- モーツァルト《後宮からの逃走》
  11月5, 11, 18, 26日
  ★今月のイチオシ！マウロ・ペーター　リサイタル 11月7日19:30
- バレエ「夜の夢」11月10、15日
- 「アリスの不思議な国」（新演出）
  11月12, 20, 27日
- リーム「ヤコブ・レンツ」（新演出）
  11月19, 22, 24, 26日
- 第３回ブランチ / ランチコンサート
  11月20日11:15, 21日12:00
  シューベルト　弦楽五重奏
  当会会員　横田誠司氏も出園
- バレエ「くるみ割り人形とネズミの王様」11月20, 25, 27, 29

www.opernhaus.ch

Circus Monti

11月2～27日　水・金20:00～、土15:00～，20:00～，日14:00～，18:00～Kasernenareal　8004 Zürich circus-monti.ch

EXPOVINA ワイン・エキスポ

11月3～17日　月～土　13:00～20:00,日　13:30～19:00
Wyschiff　Schiffsteg Bürkliplatz
www.expovina.ch

Unihockey WFC 2022

男子ユニホッケーワールドカップ
202211月５～13日
Swiss Life Arena,Vulkanstrasse 130 8048 Zürich
www.wfc2022.ch

Tonhalle-Orchester Zürich

- 11月3日　tonhalleCRUSH
  ブルックナー「交響曲第３番」
  ＋Jam-Session
- 4～６日　指揮：P.ヤルヴィ、
  ヴァイオリン：ジャニン・ヤンセン
  メシアン「キリストの昇天」、
  バーンスタイン「セレナード」、
  ブルックナー「交響曲第３番」
- 11月14日19:30　ジョルジィ・ギガシュヴィリ　ピアノリサイタル
- 11月16～18日
  Conductor’s Academy
  ★今月のイチオシ！　11月20日17:00　ロランド・ヴィリャソンコンサート
- 11月22日19:30　モーツァルト《皇帝ティトの慈悲》演奏会形式
  www.hochuli-konzert.ch
- 11月25日19:00 ルドルフ・ブッフビンダー ピアノリサイタル
  tonhalle-orchester.ch

チャーチル列車周遊 Bierfahrt

11月5日12:15 Abendessen
11月10日18:00 SBB Hauptbahnhof
www.ticketcorner.ch
チャーチル列車上で色々なビールが飲めるオクトーバーフェストや夕飯を楽しめる

Mädelsflohmarkt 女性用蚤の市

11月毎週日曜12:00～17:00
Tanzwerk101, Pfingstweidstrasse 101,8005 Zürich
www.maedelsflohmarkt.ch

グロービとエネルギー

11月8日17:00
Theater am Hechtplatz Hechtplatz 7　8001 ZH, theaterhechtplatz.ch
グロービが子供に教えるエネルギー・ショー

KETTE

Vol.163

岡田　明さん
（チューリッヒ在住）

お仕事は？

昨年の８月からオエリコン (Oerlikon)にあるHitachi Energy社で、製品/システムの品質向上活動 (Quality & Continuous Improvement) のシニアアドバイザーをやっています。この会社はスイス本社ABBと日立製作所 (日本) の合弁会社で世界の電力ネットワークに必要な大電力機器や変電所、直流変換所の建設などに携わっているグローバル企業です。

さて、今一度皆さんの子供の頃に戻って、旅行用に持参する変圧器や部屋のスイッチ、制御システム、乾電池などで灯す豆電球などの、小学校で楽しんだ実験回路を頭にイメージしてください。部屋で夜スイッチを切ると、ピカッと小さくスイッチ周囲の内蔵部が光った経験がおありではありませんか？
あれは水あめ (田舎で見かける、交通量の少ないアスファルト道路から雑草が生えているのも同じです) のような電流がうまく切れていないのです。我々の扱う遮断電流は瞬時に数千度を超すエネルギーを制御しており、まさにArc Energy Control 技術です。他部門の方々や若い生徒さん達にも、我々の分野の技術に興味を持っていただくために製品見学の機会をお作りしたいです。ハード的には大きな製品で、電気的にも、機械的にも高度でロバーストな技術、設計を必要とします。世界中に電気が灯り始めてから140年がたち、設備の近代化のために当社が供給してきた技術への取り組み、次世代デジタルトランスフォーメーション技術、2050年のカーボンニュートラルへ向けての新しい大電力機器の開発、国を越えた長距離直流送電変換所システムの建設などなど、いかにスイスZurichに本社のある当社が世界へ貢献しているかを、仲間と一緒に色々ご紹介できると思います。

スイスに来るまでの話

1981年に入社してからずっと、日本の外で灯りをともす仕事をやっていました。60ケ国300万マイルを超す出張には社内からあきれられていましたが、今回のような駐在経験は実は初めてで、中近東の砂漠の建設工事に５年いても日本人会の皆様との交流経験はほとんどありませんでした。それでも担当プロジェクト業務休暇には、ヘルメット、ピッケルを持参してスイス、シャモニーの山をガイドと登りましたが、チューリッヒは素通りでした。

スイス生活は如何ですか？

まだ１年たったばかりですので昨年８月からの奮闘記です。着任してすぐに本記事編集担当のS様に紹介されてオペラへ。秋はEDELWEISSに紹介のある、音楽家の皆様のご活躍を鑑賞させていただき、COVIDの孤独な生活にも潤いができました。新年になると日本人会の歩こう会（学生の頃、山岳会でしたが、ここの歩こう会は立派な山の会ですね）に入り、ずいぶん色々連れて行ってもらいました。６月から１０月、解禁された2000mのRitom湖で４回K氏とマス釣り。湖畔での焚火は楽しかった。“愉林にかがり火をたきて若き日の感激を語らんかな”とは、まさにこのこと。毎回、お世話になっているRitom湖(Hut) Rifugio Lago Ritomはおすすめです。大変＆大変おいしいイタリア系の食事と奥Y様（北海道ご出身）の楽しいお話がお聞きできます。是非とも来年の６月には、歩こう会の合宿を提案したいと思っています（今年の秋は、ブルーベリー収穫は期待できず）。８月には３年ぶりにCIGRE（大電力国際学会）がパリで開催されTGVで駆け付けました。この場をお借りして、この一年お付き合いいただいた日本人会の皆様に心からお礼を申し上げます。

ご出身は？

生まれは岡山県津山市。札幌の学生時代を経て、そのまま会社の関係で茨城県の日立市へ。太平洋を見渡す高台に家があり、冬は大物のヒラメが釣れるところです。今は、３回遊びに来てくれる女房が唯一の希望。ひとり娘は嫁いで名古屋で働いており、旦那様といっしょにいつかチューリッヒ近郊でサイクリングでもできればと楽しみにしております。

好きな言葉

生まれが宮本武蔵の村と近いので“我のほか、皆わが師”という言葉を子供の頃からずっと引き継いで（親父から）きました。

会員の方へのメッセージ

企業間の情報交換の場、またレクレーションの活性化にお役に立てればと考えます。当社にはフルマラソンが趣味でユングフラウヨッホマラソンへ参加したY君や、毎月、毎週？ヨーロッパ周辺国へ旅をしているH君やたくさんの魅力ある仲間がおります。気晴らしのお時間でもよいので連絡いただければ馳せ参じますのでよろしくお願いいたします。

編集後記

この文章を書いている部屋から外を見ると、紅葉が次々と散っている様子が伺えます。美しい秋もすでに終盤のようです。秋は様々なことに挑戦するによい季節ですね。この束の間の気候が、何かスポーツを始めてみたり、美術館の展覧会に足を運ぶのを後押ししてくれます。
私も何か新しいことを始めようと、今月号からEDELWEISSの編集に参加させていただくことになりました。チューリッヒに越してきてまだ一年と半年ほどで、周りにはスイス在住の大先輩たちがいる中、情報発信の場に関われることになりわくわくしています。日常の中でちょっとした日本語での読み物があると、ほっとしますよね。さらに現地文化を読み解いていく楽しさもお届けできるよう、編集作業を学んでいきたいと思います。（阿部牧子）

広告掲載のご案内
ジャパンクラブチューリッヒでは、会員の方からのお知らせ・広告掲載、フライヤー等の会報同封配送を、有料 (一部無料)で随時受け付けています。詳細については編集部までお気軽にお問い合わせください。

伝言板コーナーをご利用ください。
200文字以内のお知らせ・ご案内は無料で掲載いたします。掲載内容責任者のお名前(会員に限る)を入れた原稿を毎月10日までに編集部までメールにてお送りください。

＊JCZでは広告・フライヤー・伝言板の記載情報については責任を負いかねます。

JCZ会報誌エーデルワイス
2022年11月号
発行責任者：青砥 玄(会長)
編集：中 東生、阿部 牧子
レイアウト：鎌田 裕子

✲編集部専用メールアドレス✲
edelweiss@japanswiss.ch

JCZ Japan Club Zurich
Office of Honorary Consul
General of Japan
Utoquai 55, 8008 ZH
jcz@japanswiss.ch
www.japanswiss.ch